

2025.9
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

9号

第47巻
No.434



クサギ *Plerodendrum trichotomum* Thunb.

(クマツヅラ科 *Vervenaceae*)

生薬 シュウゴトウ（臭梧桐） 夏から秋にかけて、葉を小枝ごと採取し、天日で乾燥する。

成分 ジテルペノイド：clerodendrin A,B、その他：acacetin, meso-inositol 等。

効能 民間薬。リウマチ、半身不随、高血圧などに用いる。皮膚病、腫れ物、痔には生の葉の煎液で患部を洗う。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



北海道・本州・四国・九州、琉球列島まで広く分布し、国外では朝鮮半島、台湾、中国にも分布しています。平地から山地の日当たりのよい原野や林縁、河原、土手、山道や谷の沢沿いなどに生息します。藪の状態の所に侵入する最初の樹木として典型的な先駆植物です。庭園樹として植栽もされることもあります。低木から小高木になる落葉広葉樹で、高さは2-5m、枝は横に伸び、上方で分枝して、樹冠は横に広がります。葉は対生し、葉身は長さ7-20cmの三角状卵形から広卵形で先が鋭く尖り、葉縁は全縁、質は柔らかくて薄い。枝や葉などを傷つけると、名の通り、不快な強い臭気が出ますが、食用としての利用もあります。若葉はよく茹でて、十分に水にさらし、臭気が強いときは一晩水にさらし続けて臭気を抜きます。開ききった葉は重曹を入れて茹で、半日ほど水にさらして、悪臭と苦味を取り除きます。和え物や炒め物、煮びたし、佃煮にして食べます。生の葉は天ぷらにもできるし、茹でた葉は天日で干すと保存もでき、使うときは水で戻して生葉同様に調理します。花期は7-9月、枝先の葉腋に長い柄のある集散花序をつけ、甘い香りがする白色の花は細い筒部があり、先は5裂して平開します。萼も深く5裂し、はじめ緑色で結実時に平開して紅赤色を呈します。果期は10-11月、果実は液果で、秋に赤い萼の上に直径6-7mmの丸い実が藍色に熟し、赤色の萼片とのコントラストは美しい配色です。果実は草木染に使うと媒染剤なしで絹糸を鮮やかな青緑色に染めることができます。

同属植物のボタンクサギ (*C. bungei*) は中国中南部原産の落葉低木で、7-9月の花期には枝先に紅色~紫色の花を半球状に集まって咲かせる様子は観賞に耐えうる花木として植栽されています。繁殖力が強くよく逸脱し、湿地で群生していますが、暖地性で近畿以北での野生化は見られませんでした。近年温暖化の影響からか富山でも野生化し群生している所を見かけるようになりました。

我国でも古くから良く知られる植物で、神話時代から行われていたという宮中祭祀の一つ「新嘗祭」に「黒酒白酒」をお供えする行事があります。万葉集(700-800頃)に「天地と久しきまでに万代に仕へまつらむ黒酒白酒を 文室知努真人」と詠われています。黒酒の製造法は『延喜式』(927)の「卷第四十 造酒司」の「新嘗會白黒二酒料」に「まず米と麴で酒を作り、二甕に分けて、一甕に久佐木灰三升を和合した黒貴と不和合の一甕の白貴を造る」ことが書かれています。『本草和名』(918)には「蜀漆」の項に「和名久佐岐、一名也末宇都岐乃波」と、「恒山」の項に「和名久佐岐、一名宇久比須乃以比祢」の和名が充てられ、『倭名類聚抄』(931-937)でも「蜀漆 和名久佐木、一云夜末宇豆木乃禰、恒山 和名宇久比須乃以比禰、一云久佐木乃禰」の和名が与えられています。江戸時代初期の『多識編』(1612)にも「蜀漆、久左岐」の名があります。『用薬須知』(1726)には「常山 クサギの根を用ゆ、此れ本草綱目に謂う所の海州(江蘇省)の常山なり」と「常山」の名を使っています。これは中国本草書の『図経本草』(1062)の「常山」の項に「海州に産するものは、葉は楸(*Catalpa ovata*)葉に似て八月紅白色の花が有り、子は碧色で、山棟子(*Aphanamixis polystachya*)に似てしかも小と云うものは是なり。六月土用中葉を取りて陰乾し、細末にして骨鯁を治すること妙なり。又樹中蠹蟲、小兒疾を治し蟲をころす」とあります。「蜀漆」、「恒山」、「海州常山」、「臭梧桐」など漢字名は混乱しています。中国の古書『郡芳譜』(1621)にも「臭梧桐」の名があり、『物類品隲』に「臭梧桐 和名クサギ」とあるところから、「臭梧桐」を用いるようになりました。(村上守一 記)